寛永の役

しづや　りふかふ
Shivya　Lyucow

寛永八年（１６３１年）、既に将軍職を退き「大御所」となっていた徳川秀忠の病中に、加賀藩三代目当主、前田利常は金沢城を補修し、また他国より大いに船を購入する等々したため、恩顧あるにも拘らず、秀忠病中に乗じて謀反の意ありと疑いをかけられた。これが寛永の危機である。

このとき、潔白を証するがため、「武威を以て眞神の郡を調伏せよ」と密かに命ぜられた。この密命は真密やかに行われたが、念のため、海上に接する各藩主に幕府より「くれぐれも御気遣ひなく心得給ひ候ふ」という書簡が送られた。

この記録はいかなる史にも残ることはなかったが、大船団は今で言う山形県の飛島（とびしま）に停泊し、翌朝一気に攻め入ろうとした矢先、唐突なる暴風雨に晒され、潰滅に近い状態となり、命辛々国に帰ったのである。

幕府の思惑は図に当たった。

勝てば大和朝廷以来の眼の上のたんこぶであった眞神族の力を削げるし、負ければ前田家の力を大いに削ぐ。どちらに転んでも損はないのだ。そして古来眞神を侵さなかった本朝の判断が正しいことも証明された。鎮守の杜の御神木のように、伐ろうとする者には祟りがあるのだ。

皇朝は既に六世紀の火々禽（ほほとり）の柵（き）（城）の戦で勝利して以来、朝貢の契りを結んでいる。敢えて事を起こして、今も続く優位な関係を壊す必要はないのだ。寛永の役は前田家の疑いに乗じて、あわよくばと「ちょっと試してみた」だけなのである。

だがこれで人が実際に死ぬのだから、堪ったものではない。人権が今のように認識される以前の時代のことを、現代の感覚で批判すべきではないのかもしれないが、非情理不尽と言わざるを得ない。

天安真兮（あまやすまことや）は日本海を見下ろす岩の上に立って、考えていた。まなざしは背後から届く黄昏の光に燦めく水面を見下ろし、瞑想に耽っていた。

これらの記述は正史にはない。

『眞神風土記』や『眞神国波瀾萬丈史記』などに見られるだけであった。だから学界では否定的だ。史実ではないと言うのが大方の意見であった。

だが。

「昨日、今日のことも定かではないのに、歴史の何が確信できるのか。

同じ一つの事件の現場にいた者たちの話ですら、バラバラだというのに、歴史の何が確定できるのか。

その場にいた者すら、もはやいないのに」

声高らかに長鬚を風に靡かせ、彼はそう嘯く。

「全ての存在は考概に依存している。しかし考概は措定でしかない。我々にとっては唐突に附與され、與えられたまゝに解釈するしかない〝何か〟でしかない」

彼はこの海に突き出た一つ岩をアクロポリスと呼んでいた。この地方に珍しい石灰岩で、高さは百メートルを超え、古代祭祀の跡が発見されている。

「幕府は後に眞神奉行を置き、高額の租税を徴したが、奉行はさらに高い税を要求した。自らの懐に入れるためだ。

彼は或る日本晴れの日、供を随えて領内に於いて馬に乗っていたが、突如雷が落ちて死した。まさに青天の霹靂である。

これほどの力のある眞神がなぜ火々禽では敗れたのか。しかも直前の戦では大勝利を収めていたのに。

歴史は皆目解らない。事実は知り難い。神の御心は」

だがいずれは滅す身、そう想い、眼を閉じて顔を伏せる。史に遺れども、竟には読む人類も絶える日が来る。

さにあれば何を言わんや。

天平普蕭（あまひらふせう）は草の上に坐ってスキットボトル片手に葉巻をふかしながら言った、

「ニュース見たかい？」

「何のニュースかね？」

「バカロレアさ」

「あゝ、フランスの」

フランスでは大学に進むための、日本で言うところの大学受験（大学入試センター試験）は、高校卒業資格試験とも言うべき、バカロレア（受かればどこの大学にも入学できる）だが、制度以外にも日本とは大いに違う点がある。

例えば哲学の試験だ。バカロレアでは4時間という試験時間で、1問のみの問題を論述する。

２０１４年にフランスの高校生が論じさせられたバカロレアの問題には、『我々は幸せになるために生きているのか？』『自由であるためには、選択肢があるだけで十分か？』『芸術家はその作品の主人と言えるか？』などがある。

「今年4月のＥＮＳ（超エリート校）の問いは凄かったらしい」

「知ってる。ただ一言『Expliquer』のみ」

普蕭は手を叩いて笑った。

ちなみに『Expliquer』とは『説明する』という不定形の単語。

普蕭は言う。

「受験生の顔が浮かぶな。

何を説明するのか？　しかし目的語はない」

真兮も微笑し、

「しかも『計算機の使用は禁止する』という注意書きがあったというじゃないか。何という難問か。いや、笑うしかないが、受験生はさぞかし哭いたであろう」

普蕭も頷き、

「いったい、その問題のどこに計算機が必要なのか。必要ないのに、なぜ注釈がついているのか。あゝ、素晴らしいね。フランスは。何という崇高な国なのだろうか。哲学が重んじられている。それに比して、我ら東洋では実利主義ばかりだ。基礎科学も実利のために求められているに過ぎない。

実際、試験終了後のツイッターなどＳＮＳでは受験生のつぶやきであふれたらしい。『説明って、何を？』ってね」

ちなみにこの1問に与えられた時間は6時間であった。

真兮は憂欝な表情に戻っている。

「振り返って、東洋の虚しさよ。実利に偏る虚しさだ。死すべき定めの我ら人類には虚しさでしかない。虚偽（こぎ）だ」

「うん」

「すべては措定の下に成り立つ。

真実かどうかは危うい。ただし真実という設定、価値観、コンセプト自体が危うい。〃危うい〃

もまた。

何を為さんや。

あゝ、喩えば、すべての措定が正しいものだとし、群雲集めるゼウスのごとく考概を集めて畢竟の思惟をすれば、存在は愛であると言うこともできるだろう。肯定とは只管存在なる存在 Sein であるという理由で。

されども実践に於いてさような愛は神にしかなせない。人には限界があり、『人の道』を逝く他に逝き方がない」

普蕭は問う、

「だが措定が正しい場合と、措定が正しくない場合とは対立しないだろうな。

〝正しくない場合〟の集合Aは〝正しい場合〟の集合Bを含む、って言うか、BはAの〝部分〟としてAに溶け込んでいて区別はない。

逆に言えば、AはBに浸透している、ただしAの方がBより大きい、ということだろうな。

だって、考えてもみたまえ、もしすべての措定をしないとしたら」

真兮はおどけて諸手を挙げ、

「措定しないとしたら？　措定しないなら、措定しないすら措定されていないから…あゝ、それがもう、どういうことになるか、思惟のしようすらない。不可能という状態になることすらかなわない。いや、さようにベクトルを定めることすらも…。

ふ。

眞の眞なる未遂不収」

そう言って、龍の哄笑をする。

完